７３１通信
２４号

７３１部隊被害者遺族を支える会

連絡先　東京都新宿区新宿1-6-5ｼｶﾞﾗｷﾋﾞﾙ

９Ｆピープルズ法律事務所内

１００部隊と鼻疽研究の実態

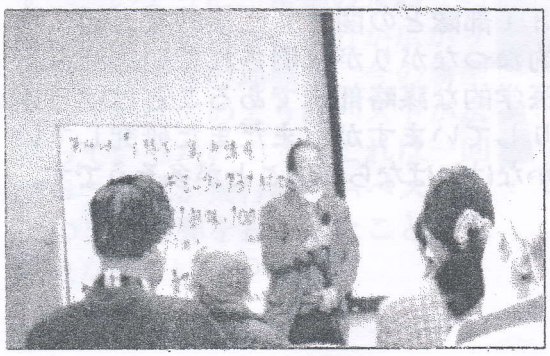
１２月４日、東京駒込で７３１ネットワークの連続学習会が行われました。この学習会は「ヒロシマ連続講座」という市民団体と共催でおこなわれました。

はじめに加藤哲郎さんから、小河孝先生の紹介がありました。関東軍軍馬研究処（100部隊）の研究第一人者である小河先生が登場しました。

小河先生は概要次のようなお話をされました。

日中戦争では、50～60万頭の軍馬が動員されました。日本の馬は元来小さな馬でした。今で言うポニー程度の大きさでした。1900年の義和団事件の時、日本から派遣された馬はどうにも役にたたなかったのです。その後改良を重ね、大型の洋型の馬が生まれました。

その後、ガソリンが使用され、航空機の時代になりました。それでも車が使えない草地や田畑などでは、馬が活躍することになります。1925年には奉天（今の瀋陽）に獣医研究所がつくられます。1936年に７３１部隊の建設と同時に１００部隊もつくられます。



満州は家畜の病気が多く発生していました。牛疫（牛ペスト）、炭疽、鼻疽などです。牛ペストは現在では世界で撲滅されています。炭疽は人獣共通感染症で、これに感染すると呼吸困難になり、死亡に至ります。しかも炭疽菌は土の中で30年生きていることがわかっています。コッホが18世紀にワクチンを開発しています。

鼻疽は第一次世界大戦の時に、軍馬に広がり、1930年にソ連・満州・中東で広がりました。人が感染した例は多くありませんでした。奉天の獣医研究所で室内感染が出てしまいました。1931年4月、獣研で死者が出てしまいました。その後も死者が出て、1936年1月25日の満州日日新聞に報道されました。1936年には満州の馬の23.3%が罹患していることがわかり、日満家畜防疫会議が開かれました。馬疫研究所がつくられ、馬政局第１科では、競馬でテラ銭を稼いで、研究に使うなどをやっていました。撫順の戦犯管理所での元戦犯の供述書によると100万ccの血清（鼻疽の免疫血清）を生産し、研究といいながら、100部隊に提供してい

たことになっています。1938年になると、陸軍省も鼻疽対策を打ち出します。

1941年の100部隊の構成は、隊長・並木才三、細菌科長・井田清で、その井田の下で鼻疽の研究をしていた三友一男が戦後ハバロフスク裁判の被告になり、自身のやったことを告白します。関東軍の夏季演習で川に鼻疽菌をながした事実を告白しました。また、別の100部隊員は、ハイラルで家畜を集め、炭疽菌などで汚染させたこともわかりました。

戦後、奉天の獣研は、新中国で活用され、豚熱、牛疫の撲滅に貢献したのです。

日本では、戦後ＧＨＱの尋問が続きます。100部隊の安藤敬太郎、山口本治、西村武、佐藤宇三郎などへの尋問などにより、鼻疽菌の開発、獣疫の実験などをおこなっていたこともわかってきました。軍馬防疫処では、馬への血清をつくり、鼻疽の治療テストもおこなっていたという供述もあります。しかし、尋問を受けただれも「自分がやった」ということではなく、伝聞情報が多く、責任を押しつけ合っていたようです。人への感染を否定する人と人への感染を証言する人がいました。そして、ＧＨＱは、決定的証拠がない、としてしまいます。

こんなお話の後、加藤哲郎さんから「獣医学の位置が軽視されています。医者は厚労省の管轄ですが、獣医者は農水省の管轄になっています。今、獣医は犬猫などのペットが中心で、畜産との関連で馬・牛などがちょっと扱われるだけです。731部隊のことを考える時、馬の疫病は人の医学とともに重要になっています。

731部隊は隠匿物資をこっそり持ち帰っていますが、100部隊については、全体の調査がすすんでいないのが現状です。獣医学会が機材を引き継いだのですが、その先はよくわかっていません。加藤久弥が戦後岩手大学の総長になっています」という発言がありました。

また、小河さんからは「日中戦争で50～60万頭の馬が動員されましたが、一頭も生きて戻ってきませんでした。南方にも馬は送られましたが、暑さに弱く、ニューギニア・ビルマに派遣された馬も一頭も帰ってきませんでした。中国戦線では、寒さに強い馬は活用されますが、その扱いはひどい状態で、戦闘で９割が「戦死」します。

また、参加者から「ヒロシマの似島に検疫所があり、馬匹検疫所があり、軍馬が一頭戻ってきたという記録があり、そこで死体処理をしたということになっています」と言う発言もありました。

また、質疑応答では「馬の鼻疽の研究は欧米ではどうなっていましたか」と言う質問に対し、小河先生から「ヨーロッパでは馬の鼻疽はなくなっていました。東欧で少しあるぐらいでした。従ってヨーロッパでは研究はしていません」と答えられました。また「100部隊の構成をみるとには女子もいたようだが、看護師をしていたのですか」という質問に対して「そうではありません。事務・庶務が多かったようです」と答えられました。

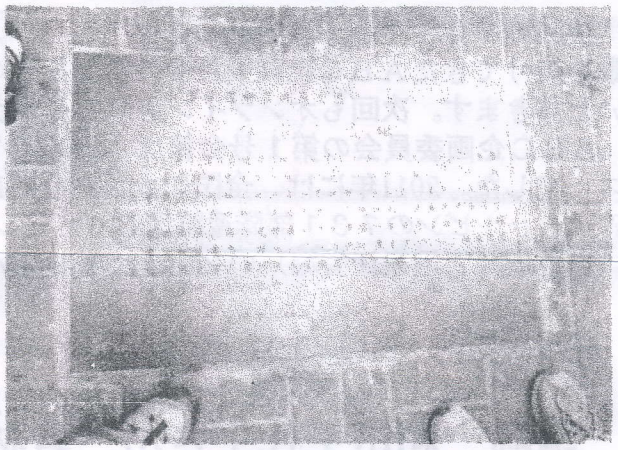
結局、100部隊のことについては、わかっていないことが多くあります。７３１部隊との関連も直接的な人的・物的なつながりが証明されていません。医学的な謀略部隊であることははっきりしていますが、まだまだ研究していかなければならないことが多そうです。

湖南省・常徳への細菌戦

７３１部隊の「成果」を実戦に

1941年11月、日本がアメリカ・イギリスを相手に戦線を拡大しようとしていたころ、日中戦争は泥沼に陥り、中国各地で戦闘が続いていました。

華中洞庭湖西方の湖南省常徳で、この年11月４日、日本軍の飛行機から穀物に混ぜられたペストノミが投下されました。これは陶器にいれられた「陶器爆弾」でした。ペストノミがねずみにとりつき、ネズミがペストに感染します。このネズミが動き回り、人家に侵入し、ノミが人間にとりついて、ペストに感染させます。７３１部隊ではそれまでに綿密な実験をくりかえし、その成果を見るために実戦で使用したのです。常徳では、11月12日に最初の患者がでました。14日までに４人の患者がでます。１２月までに７人の死亡が確認されました。42年１月に１名の患者が出て、いったんペストの流行はとまります。しかし、３月から二次流行が始まり、常徳で３月から５月の間に28人がペストに感染し、17人が亡くなります。その患者の家族が旅行し、隣の桃源村で６月にペスト患者が続出します。このように、常徳のまわりの村に次々とペストの流行が広がります。湖南省の地域で、今の新型コロナの拡大のようにペストが広がっていったのです。これは一回だけ日本軍が飛行機からペストノミの当機爆弾を投下したことが原因となっているのです。



日本軍は安上がりの兵器として細菌を武器として、開発し、それを実戦で使ったのです。

今、常徳市の中心街に「ここに日本軍がペスト菌を混入した陶器爆弾が投下された」というポイントが道路上に描かれています。上の写真

陶器爆弾が投下されたところは今は住宅街になっています。常徳市鴎鷺街

次回の学習会

７３１部隊を追究する市民運動

ーＡＢＣ企画委員会の歩みー

次回の７３１ネットワークの連続学習会は、７３１部隊のことを追究する運動を続けてきたＡＢＣ企画委員会の活動をその中心となってきたお二人にお話いただきます。次回もオンライン講演会ということで、おこないます。

ＡＢＣ企画委員会の第１号会報は、1995年７月発行の「７３１部隊展ニュース」でした。2011年には、全国にカンパを呼びかけ、下の写真のような謝罪の碑」をハルビンの７３１部隊遺跡地内に建立しました。「７３１部隊罪証鉄証」（吉林省編と黒竜江省編）の２冊を出版しています。

テーマ：７３１部隊を追究する市民運動
ーＡＢＣ企画委員会の歩みー
講師：和田千代子さん、若林成士さん
（ＡＢＣ企画委員会事務局）
日時：１月２９日（土）午後２時半～

参加無料、申し込みメールアドレス：nobu.goi@jmail.com
（定員100名）

ハルビン７３１罪証陳列館敷地内にある「謝罪と付箋平和の誓い」碑